

研究班番号【 16 】  
文豪三大クズ！？～作品に残された太宰の人生～

16班:大島 由衣、中西 梨帆、横山 美羽

## Abstract

The writer Osamu Dazai, who left many great works of literature such as "No Longer Human," "The Setting Sun," and "Run, Melos!" is now regarded as one of the Three Great Scums of Literature. He committed suicide a total of five times during his life, the last time with his mistress. The purpose of this study is revealing some special reason for his actions. We guessed they are based on Dazai Osamu's views on life and his complicated relationships with his mistresses.

Dazai was born into a wealthy family. However, this study shows that his parents did not bring him up with affection, and suggests he grew up without knowing love. In such a life, Dazai gradually became abnormally attached to the affection of others around him and began to treat everyone with a false sense of self so that no one would leave him. This may have amplified the darkness in Dazai's heart. Dazai was unable to reject any of the women who showed their affection toward him, and this was also a source of his distress. This study concludes that the true reason for Dazai's strange behavior was his intention of "not wanting to fall into misery anymore" and "wanting to end happily ever after".

## 要約

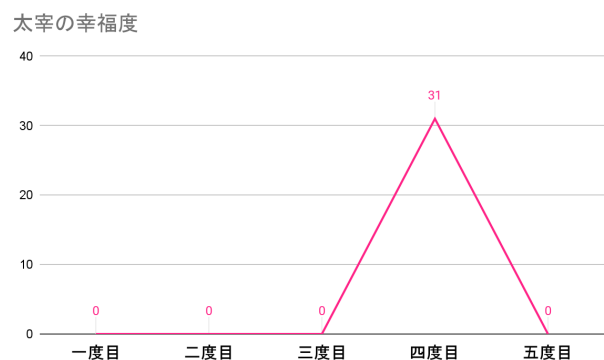
『人間失格』『斜陽』『走れメロス』など、数々の素晴らしい文学作品を残した作家・太宰治は今、「\*文豪三大クズ」の一人として数えられている。そんな彼は生涯で計五回もの自殺を繰り返し、最期は愛人とともに心中を遂げた。彼が自殺を繰り返したのには、何か特別な理由があったのではないだろうか。そこで本研究では、この太宰治の人生観や拗れた愛人関係について研究した。

裕福な家庭に生まれた太宰だが、それ故か両親が直接太宰に愛情を持って育てることはなく、太宰は「愛」を知らずに育つ。そんな生活の中、次第に太宰は周囲からの愛情に異常に執着するようになり、自分から誰も離れていかないと誰にでも自分を偽って接するようにもなった。それが余計に太宰の心の闇を増幅させてしまったのかもしれない。太宰へ愛情を向けた女性たちを太宰は一切拒むことができず、それも太宰の悩みの種となっていたが、その愛人たちの中でも特に太宰へ一途であった愛人・山崎富栄が、自分からいつか離れて行ってしまうかもしれないという恐怖に耐えきれず、太宰はその女性と心中をする決断をした。したがって、本研究における太宰が自殺を繰り返した真意は、「もう不幸に陥りたくない」「幸せなまま終わらせたい」という太宰の本音にあったのだらうと結論付けた。

## 1. はじめに

数々の有名作品を生み出した太宰治の、「走れメロス(新潮文庫)」のあとがきには「親友\*<sup>2</sup>檀一雄と旅し、共に金がなくなったときの苦しい体験がこの作品のきっかけとなっている」との文章があった。そこから、他の作品にも彼の人生と複雑に絡みついているものがあるのではないかと思い、文豪太宰について調べた。結果、彼はどうやら、「文豪三大クズ」に数えられ、更には五度の自殺を試みた人物であったことがわかった。そこで本研究では、作家太宰の遺した作品より、彼の人生観と、自殺を繰り返した真意について推察する。

本研究では、文豪太宰が生涯で五回もの自殺



を繰り返した真意を推察し明らかにする。令和二年度高津高校LC国語班の先行研究にて示された、太宰の人生における幸福度を数値化したグラフによると、太宰が経験した五度の自殺のうち、他に比べ、四度目のみ幸福度が高かった。これより、四度目の自殺における太宰の本気さは低いと考えられる。このことから、太宰が失敗した自殺には、死ぬ以外の目的があったのではないかと考えた。

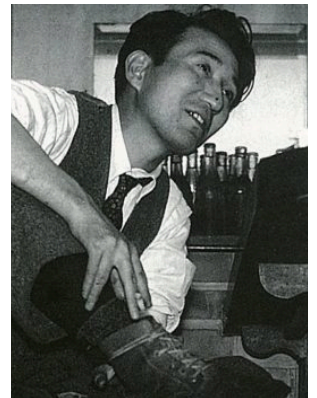
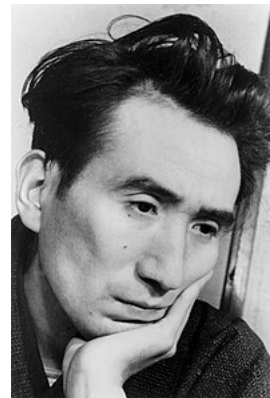
## 2. 研究手法

まずは太宰の作品を読み、太宰のための追悼文集なども読んだ。そして要所々で、他に心理学書なども参考にしている。それから太宰の生涯について、彼の幼少期から晩年まで、さらに交友関係や太宰の家族、妻・愛人との関係をインターネットや書籍より調べた。その後、先行研究を参考にして幸福度を数値化し、自殺の本気度について考察した。

## 3. 結果

### □太宰治とは

太宰治は1909年に青森県で生まれた。太宰治という名はペンネームで、本名は津島修治という。<sup>\*3</sup>井伏鱒二や<sup>\*4</sup>芥川龍之介の影響を受け小説を書き始めた。四回もの自殺・心中未遂を繰り返した後、五回目(1948)の入水で愛人と心中を遂げることとなる。彼の代表作のうちの一つである『走れメロス』は現在でも小中学校で教材に使われている。



### □作品や友人関係から読み取る太宰治の人物像

#### ○作品から読み取る太宰治の人物像

太宰の自伝的小説といわれる『我が半生を語る』、『人間失格』から推察する。『我が半生を語る』では「ただもう一刻も早くこの生活の恐怖から逃げ出したい。この世からおさらばしたいというようなことばかり、子供の頃から考えている質でした。」「私の小説もただ風変わりな珍しい位に云われてきて、私はひそかに憂鬱な気持ちになっていたのです。」という文章があり、普段からネガティブな思考をしていたと推察できる。また、『人間失格』では「自分のような、人を信じる能力がひび割れてしまっているものにとって、ヨシ子の無垢の信頼心は青葉の滝のように清々しく思われていた」、「自からどんどん不幸になるばかりで、防ぐ具体策がない」という文章があり、自分はどこか欠けていることを認識しつつも、それを治す方法も分からず、負のサイクルに陥っていたと推察できる。

このことから太宰は「自分は元から周りのコミュニティでは生きづらい人間であり、適応することもできない人物」とであると結論づけた。

#### ○知人からの評価

太宰が自殺した後、交流のあった文豪が書いた追悼文から推察する。

太宰の友人である檀一雄の追悼文には「人々に絶望しつつも人情の風情に憧れていた」、「彼のような虚栄の男に恋愛は成立しない」という文章があり、本心では絶望しながらも一縷の望みを信じて周りには明るく振る舞っていたと推察できる。また、<sup>\*5</sup>無頼派仲間である<sup>\*6</sup>坂口安吾の追悼文には「太宰は<sup>\*7</sup>M・C、マイ・コメジアン、を自称しながら、どうしても、コメジアンになりきることができなかった」、「太宰は人間に失格していない」という文章があり、普段は明るく振る舞いつつも、実際は悩みを捨てることができず、道化と本心の間で揺れていたと推察できる。

このことから、太宰は「自分の犯した不倫や浮気、自殺未遂、心中未遂について、本心では深い悩みを抱えていながらも、人と接する際はそれを笑い飛ばすように明るく振る舞っている人物」であると結論付けた。

このように、太宰治は、作品からはその悲観的思考が伺えるが、知人からの評価では全く違う明るい人物像で評価されていたことがわかった。そこで今後は、津島修治という人物を知る知人によって描かれた人物像については津島修治、作品から想像される作者の人物像については太宰治として、別の人物と定義しその差を比べていこうと思う。

◎作家・太宰治と作家・津島修治では人物像が違って見えるのはなぜか？

坂口安吾は、津島修治について、「コメディアンになりきれなかった」と残している。これは太宰治と津島修治の「差異」について指摘しているのではないだろうか。坂口安吾が残した追悼文によれば、そもそも津島修治が「自分はコメディアンである」と自称していたとあるが、安吾はそれを否定している。では坂口安吾や太宰治の言う「コメディアン」とは一体何を表すのだろうか。

自伝的小説「わが半生を語る」の「いつも芝居をしているように、自分をくだらなく見せるというような、殆ど愚かといってもいいくらいの努力をして生きて参りました。」から、津島修治は本心の権化である太宰治の片鱗を隠す為に、繰り返していた自殺未遂や浮気などを道化話として、笑って友人に語っていたのかも知れない。要するにここでの「道化」は「コメディアン」と同義であることが分かる。つまり「コメディアン」とは、本心を表す太宰治のプライドによって作られた津島修治という仮面といえる。周りからの評価を凄く凄く気にしていた模様。

結果、作家・太宰治と作家・津島修治で人格が違っていると感じられるのは、作家本人の本心そのものであるのが太宰治、作家の自尊心から負の感情を覆い隠して笑い飛ばしてしまうのが津島修治であると推察した。

加えて作家・太宰治の作品内には、「愛」について言及している文面が多数あり、作家・津島修治においてもその終生を辿ると、彼もまた、「愛情」に生きた人物であることが分かった。ではどうして作家太宰治・津島修治は「愛」を追い求めたのだろうか。(以降は作家・太宰治、津島修治共に一貫して太宰とする)

## □太宰の幼少期(愛情について)

太宰は、生母の津島夕子が病弱であったため、生まれてすぐ乳母に預けられた。その乳母も一年足らずで太宰の生家、津島家を去ってしまい、太宰はその後更に叔母に預けられ、以降は叔母に育てられた。つまり太宰は、生まれてからたったの一度も実の母親に育てられたことが無い、という事になる。父・源右衛門は議員職にあった為、家に帰って来ることが殆どなく、太宰が十四歳のとき、入院中に死去してしまう。これより、太宰は両親からの愛情を十分受けていなかった可能性が非常に高いと考えられる。

太宰の幼少期を記したとされる『思ひ出』には「その頃(おそらく4～5歳)の父母の思ひ出は生憎と一つも持ち合わせない。」とあり、幼少期両親と会う機会が無かったと推察できる。また「父母が私を愛してくれないという不平を書き綴った。」とあり、幼少期の環境に不満があったと考えられる。

ここで、両親から愛情を十分に受けて育たなかった場合、子供はどんな大人に成長する傾向にあるのか調べたところ、以下のような特徴が挙げられた。

## ○幼少期における愛情不足で育った大人の特徴

幼少期、両親からの十分な愛情を受けずして育った大人の特徴として、以下が挙げられる。

- ・自分の価値を見いだせない。
- ・自らの愛情を判断できない(「愛」が何か理解することができない)。
- ・愛されたい、認められたいと感じる。
- ・恋人を信用することができず、すぐに不安を感じてしまう。

心理学上、自殺をする人の心理として、「自己肯定感が低い」、という場合がある。これは、愛情不足で育った大人の特徴の「自分の価値を見いだせない」と関連しており、太宰の作品から見て取れる悲観的な考え方などは、太宰本人の自己肯定感の低さからくるもので、自殺の動機の一つに「自己肯定感の低さ」があるのかもしれない。実際に『我が半生を語る』では「なにかいつも自分がそのために人から非難せられ、仇敵視されているような、そういう恐怖感がいつも自分につきまとって居ります。」や「背の丈を二寸くらい低くして、歩いていなければならないような実感をもって生きてきた。」など自己肯定感が低いように感じられる文章があった。



## □太宰の思う、「愛」について

1942年、太宰は33歳、この頃、太宰は「一問一答」という作品を残している。すでに太宰は四度の自殺未遂・二度目の結婚を経験した後であったが、作中では「愛する」という事は、どんな事だか、私にはまだ、わからない。」、また、「愛などと言うと、甘ったるいもののお考えかも知れませんが、むずかしいものですよ。」などと語っている。しかしこれが太宰の本音であるとするならば、33歳までに関係のあった太宰のかつての愛人は、果たして本当に太宰に愛されていなかったのだろうか。

## 歴代太宰治の妻・愛人

### ①小山初代(1回目の結婚相手)

『HUMAN LOST』『東京八景』に登場する女性のモデルとなった。青森の料亭で住み込みで働いていた当時(1925)、高校一年だった太宰と馴染みになり、五年後(1930)太宰の教唆により上京。以後太宰と同棲を始め、結納を交わすが、太宰が心中未遂事件を起こすと激怒。その後復縁し仮祝言を上げるが津島家から入籍は許されなかった。その後1936年、太宰は薬物中毒の治療のために入院。その間、小山初代は太宰の義弟と関係を持ってしまった。これが翌年1937年に露見。ここで一気に太宰との関係が悪化し、太宰とともに温泉旅館付近で心中未遂を図るも失敗。太宰と関係を絶った後、中国で病死。



### ②田部シメ子(田辺あつみ)(ツネ子)(愛人)(太宰と鎌倉で心中) 死亡



広島県出身で末娘として生まれる。「この子でおしまいにしたい」という願いから名付けられた「シメ子」の名を嫌い、若いうちから「あつみ」と名乗っていた。女給として働いていた銀座の\*喫茶店では「田辺あつみ(店内での源氏名はツネ子)」で通っていた。あつみ見たさに客が激増する程の美貌の持ち主で、明るい人柄も評判だったとのこと。1930年11月、喫茶店の客として知り合った太宰とともに\*カルモチンを購入して\*鎌倉へ。睡眠薬嚥下による心中を図るも、田部のみが死亡。死の直前、彼女が叫んだのは太宰の名ではなかったと伝えられている。生き残った太宰は自殺幇助罪の容疑で逮捕されたが起訴猶予処分となった。

### ③石原美知子(再婚後の妻)

太宰の作品、『春の盗賊』『薄明』『親友交歓』『女神』『父』『美男子と煙草』『家庭の幸福』『十二月八日』で登場。1938年から井伏を通じて縁談の話が進められ、1939年、太宰との見合いがまとまり、結婚。1941年に長女、44年に長男、47年に次女が誕生した。1997年(平成9年)、心不全により死去。85歳没。遺骨は、太宰が眠る三鷹市禅林寺に葬られた。



### ④太田静子(愛人)(子供授かる・認知証受け取る)(斜陽の元ネタ日記所有者)

滋賀県、開業医の父の元に誕生。歌人・作家として活動した。計良長雄と結婚するも長女が早世した後は協議離婚。太宰の愛読者であった弟の勧めで『虚構の彷徨』を読み、日記風告白文を太宰に送ったところ、太宰から返事として自宅に招待され、同年9月知人と共に太宰宅に訪問を果たし、更に同年12月、太宰からの電報で呼び出され既婚者であった太宰と恋に落ちた。1947年に小説の題材として日記の提供を依頼され、このとき太宰の子を受胎する。同年11月12日、太宰の子を出産し、太宰は認知書を認めた上、自らの本名・津島修治から一字採って「治子」と命名、月額1万円の養育費を送ることを約束した。1982年、肝臓癌により死去。



### ⑤山崎富栄(愛人)(太宰と玉川上水で入水) 死亡

東京府生まれ、父は東京婦人美髪美容学校の設立者。1944年、奥名修一と結婚。しかし修一は新婚わずか10日余りで単身赴任し、さらに現地で徴兵を受け、富江は3年後、そのまま戦死の広報を受ける事となった。東京大空襲により両親と共に滋賀県へ疎開していたが、1946年春、鎌倉市長谷で美容院マ・ソアールを開業。1947年、屋台のうどん屋にて飲酒中の太宰と知り合い、2ヶ月後太宰から「死ぬ気で恋愛してみないか」と持ちかけられ、「若し恋愛するなら、死ぬ気でしたい」と答える。7月14日、日記の中で両親宛の最初の遺書を書く。「太宰さんが生きてゐる間は私も生きます。でもあの人は死ぬんですもの」。富江は約20万円の貯金を太宰の飲食費や薬品代、訪問客の接待費などに使い果たしていたが、1948年5月下旬頃から、太宰との関係に齟齬をきたすようになっていた。6月13日、太田静子宛に書簡を投函「わたしは修治さんが、好きなので一緒に死にます」。同日深更、太宰と共に玉川上水へ投身。6月19日午前6時50分頃、水死体となって発見される。富江の死顔は「はげしく恐怖しているおそろしい相貌」だったが、太宰の死顔は富江とは対照的に穏



やかでほとんど水を飲んでいなかったことから、太宰は入水前すでに絶命または仮死状態だったと推測された。28歳没。

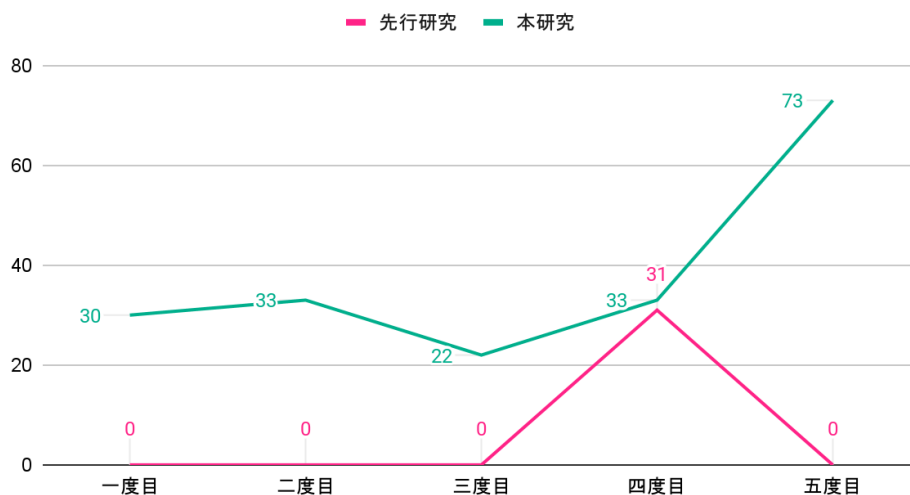
推察を重ねた結果、「一問一答」で太宰が語った「愛」についての意見は、確かに太宰本人の本音であると結論付ける事とした。しかし、太宰の愛人に対する愛情について、それを一切感じていなかった可能性を、本研究では否定することとする。

先述にある「愛情不足で育った大人の特徴」の内に、「自らの愛情を判断できない」「愛されたい、認められたい欲求がある」「恋人を信用できず、すぐに不安になってしまう」が挙げられていた。愛情不足で育った太宰には、「愛」を理解することができず、自分が愛人や妻に向けていた感情が「愛」であるか理解できていなかった可能性がある。加え、愛されたことがないと言うことは同時に、「人の愛し方」も分かっていなかった可能性が高い。「愛されたい」と密かに願っていた太宰に、愛人や妻たちは溢れんばかりのそれを与えた。自分に矛先を向けられた愛情をしっかり受け止め、それを相手にも返しつつ良好な関係を結んでいくことが、愛し方も愛され方もわからない太宰には、出来なかったのではないだろうか。

一度目の婚約をした際にも、太宰には愛人がいた。太宰の初めての婚約は恋愛結婚であった。しかしどうして太宰は愛人を作ってしまったのか。この原因は「愛されたい、認められたい欲求がある」「恋人を信用できず、すぐに不安になってしまう」に関係していると考えている。妻ではない別の女性に向けられた愛情を無視することも、拒否することも出来なかった太宰。妻さえも信用できていなかった太宰は、妻の自分に対する愛情を試す為に、愛人として別の女性からも愛を受けていたのかも知れない。そして、自分の「愛」を理解できていなかった太宰は、妻・愛人に向ける「愛している」という言葉に疑問を持ってして尚、それも太宰の本音であったことに間違いはなかったのである。

## □太宰の幸福度

### 太宰の幸福度



本研究では、自殺時期周辺の出来事から太宰の幸福度を推察し、それをもとに班員全員で考えを照らし合わせた上で、数値として表した。

#### 4. 考察

先行研究では、太宰治の作品の幸福度と津島修治の人生の幸福度が一致しているものと位置付けられたが、本研究では、太宰治の幸福度と津島修治の幸福度そのものが一致していると言うより、津島修治の行動や心情がどうしてそのように動いたのか、という点に着眼する。

##### ① 一度目の自殺

1919年、太宰20歳の時であった。単独で、大学の寮の自室にて「思想の違い」を動機にカルモチンを用いた自殺を単独で図った。太宰の生まれは名門の家で資産家で、本来なら資本主義思想であるべき(と本人は考えていた)なのに対し、\*<sup>1</sup>左翼思想を持っていたことによる、「思想の違い」に苦しみ、自殺を決意した。

##### ② 二度目の自殺

1930年、太宰が21歳で、一度目の自殺未遂の翌年のことだった。鎌倉七里ヶ浜小動崎畳岩(神奈川県)で、バーの女給であった田部シメ子と共にカルモチンを用いた心中を図った。小山初代と婚約する条件に「津島家からの除籍」を条件に出され、太宰は初めそれを了承していたが、後々、その条件を出された理由が「太宰の\*<sup>2</sup>シンパ活動」にあったことを知って気に病み、小山初代と結納うい交わした四日後にバーでシメ子に泣いて悩みを語ったと言う。後に太宰と一緒にバーに行った事がある義兄の小館保は、シメ子のことを「理知的で健康そうで。返答が妙に健やかな、誰でも好感が持てるような明るい気質の女性であった」と回想している。

##### ③ 三度目の自殺

1935年、当時26歳である。理由としては大学を卒業できないことへの不安に就職活動の不採用も重なった心的ストレスによるものであると考えられる。突発性が高く、計画されたものではないと考えられる。

##### ④ 四回目の自殺

谷川温泉付近でカルモチンを用い、妻・小山初代と心中を図る。妻・初代の不倫が原因。「姥捨」に書かれたこの心中未遂は、太宰の自殺企図の一つとされている。睡眠薬常習歴のある太宰が、死ぬことを目的とした大量服薬の量を間違えるとは考えにくい。加えて、薬で気を失った後に首が締まるように帯を巻くというやり方は、本当に死ぬために首に帯を巻いたのか疑問がある。3月下旬の谷川温泉付近は夜間、氷点下まで気温が下がり、睡眠薬を服薬して眠ってしまった場合、凍死する可能性が非常に高い。また、谷川温泉へ向かう際に初代が身辺整理を行った形跡が全くないなど、不可解な点が多い。

これらのことから、この心中未遂はそもそも事実が無く、少なくとも事件時には、太宰は死ぬつもりが全くなかったことは間違いないと考えられる。理由としては同居後の夫婦間の不信感や軋轢の中で、別れを決意した太宰が、失敗した以上一緒に生活する理由も消滅したと主張するために起こした偽装心中という説、世間体が立ち、死ぬ気で心中を決意した以上生き残った以上別れるしかないといった離婚の理由付けであるという説、山奥で結婚式を挙げたように、同じ山奥の谷川温泉で別れるという儀式を行うために太宰が仕組み、新たに生まれ変わり、再生するための太宰にとっての儀式であった説が唱えられている。

##### ⑤ 五度目の自殺

1948年38(39)歳(誕生日前に死亡が確認されているため)の時である。愛人の山崎富栄と共に心中自殺を図ったとされ、それぞれの遺書も残されている。富栄の遺書によると、太宰は富栄が必要不可欠だったと示すような文章や、太宰が離婚して、富栄との入籍をほのめかすような文章もあったことから、二人はお互いに深く依存しあっていたのかと考えたが、太宰の遺書には、妻宛に「お前をいちばん愛している」と書き綴るなど、二人の関係は富栄が一方的に依存していた傾向にあると推察できる。遺体の発見時には、心中自殺の方法は入水であるのに対し、太宰の遺体は首にロープが巻き付いており、かつロープの端は太宰の口内に押し込められていた。事前に富栄によって他殺死を遂げた

のかもしれないが、詳細は不明のままである。本研究において、この心中自殺は、「心中計画はそもそもあったものの、太宰に依存していた富栄による合意の上での、他殺後の富栄の自殺」であると考えている。

#### ○グラフから読み取れること

太宰は人生に絶望して自殺を行ったのではなく、幸福を失うのを恐れて自殺を行った可能性があると考えられる。このことから、自殺時の状況推測ではなく、自殺時の太宰の心情推測によって決定した太宰の幸福度によると、どの自殺も幸福度が0ということはなかった。

#### ○結果に対する考察

この結果は、太宰の幼少期の愛情形成が不十分であったことに起因していると本研究では考察した。愛情への理解が軽薄であったためか、愛されたいという願望が大きくあったのではないだろうか。心中を完遂させた当時、正妻を持ちながら二人もの女性を愛人として囲っていた太宰は、愛人二人から得た愛を拒むことができなかったのだろう。不倫相手という不安定な関係の中、太宰はこの愛情を失うことを恐れていたのではないか。共に心中を遂げた愛人の山崎富栄はその中でも特に太宰への執着が強いことが、残された遺書などから読み取れる。太宰は、そんな富栄からの深い愛情を失う恐れに耐えられなかったがために、心中を遂げたのではないか。波瀾万丈な太宰の浮き沈みが激しい人生の中で、「幸せな時に死んでしまいたい」という願望が窺える。

太宰治は、幼少期の愛着形成期に十分な愛情を受けておらず、「愛」について理解が乏しく、そのまま成長した人物であり、「愛」について悩み、それを信用していないにも関わらず誰よりもそれらを欲していた。太宰が残した作品から、「作家活動のために」自殺を繰り返したとの考察も出ているが、これまでの研究の末、それは「表の顔」の太宰の考えであると考えている。つまり、太宰が自殺を繰り返したその真意は、太宰がその生涯で最も執着していた「愛情」にあると考えた。愛人・山崎富栄から深い愛情を受けた太宰は、この幸福を手放したくないと思ったのだろう。遺書にはそれらしい事を書き、死の直前ですら周りからの評価を気にしている文面が見られる。彼は相当、自分をそういった愛を受けられるような人間だとして認めていなかったのかもしれない。そしてそのような思考回路は、幼少期に両親から愛されて育たなかった太宰の経歴によるものであると考えている。

## 5. 結論

作家太宰治が文豪三大クズに数えられてしまったのには、繰り返した自殺や不倫などが挙げられる。加えて自殺においては不倫相手と入水による心中と言うが、どうして太宰は生涯に五回もの自殺を繰り返したのか。それは、太宰の育ちにあった。裕福な家庭に生まれた太宰だが、それ故か両親が直接太宰に愛情を持って育てることはなく、太宰は「愛」を知らずに育つ。その結果、太宰は周囲からの愛情に異常に執着するようになり、誰にでも自分を偽って接するようになり、余計に太宰の心の闇を増幅させていった。太宰へ愛情を向けた女性たちを太宰は一切拒めず、それも太宰の悩みの種となっていたが、その愛人たちの中でも特に太宰へ一途であった愛人が自分からいつか離れて行ってしまうという恐怖に耐えきれず、太宰はその女性と心中をする決断をした。したがって、本研究における太宰が自殺を繰り返した真意は、「もう不幸に陥りたくない」「幸せなまま終わらせたい」という太宰の本音にあったと考えられる。

## 6. 参考文献ならびに参考Webページ

太宰治(1989)『太宰治全集1～10』筑摩書房  
太宰治(1936)『思ひ出』青空文庫



太宰治(1942)『一問一答』青空文庫

太宰治・山崎富栄『雨の玉川心中』青空文庫

(2018)『太宰よ！45人の追悼文集 さよならの言葉にかえて』河出書房新社

(2006)『心理学概論』ナカニシヤ出版

(1956)『教育心理学事典』金子書房

太宰のふるさと情報倶楽部『太宰ミュージアム』(2024年3月11日に閉鎖)

[https://dazai.or.jp/modules/know/index.php?content\\_id=7](https://dazai.or.jp/modules/know/index.php?content_id=7)

高津高校76期生『太宰の人生と関係性』

<https://kozu-osaka.jp/cms/wp-content/uploads/2020/11/c9be36545f0042b4a5eaf203b043e2ed.pdf>

厚生労働省『自殺を考えている人の心理』

[https://www.mhlw.go.jp/content/text3\\_03\\_7.pdf](https://www.mhlw.go.jp/content/text3_03_7.pdf)

愛情不足で育った大人の特徴

<https://happyvmail.co.jp/happylife/characteristic/lack-affection/>

## 7. 注釈

\*<sup>1</sup>文豪三大クズ…明確な決まりないが一般的に太宰治、中原中也、石川啄木の三人のことであり、本研究でもこの三人と定義している。森鷗外、島崎藤村などが挙げられることもある。

\*<sup>2</sup>檀一雄…最後の無頼派作家とも言われた小説家。太宰とは盟友と言っている程の関係であった。(1912～1976)

\*<sup>3</sup>井伏鱒二…小説家。太宰とは師弟の関係であり、よく太宰の面倒を見ていた。(1898～1993)

\*<sup>4</sup>芥川龍之介…小説家。太宰は芥川を敬愛しており、小説家として影響を受けているとされる。また、太宰は芥川賞を受賞したがっていたが、生涯受賞することはなかった。(1892～1927)

\*<sup>5</sup>無頼派(ぶらいは)…第二次世界大戦後の昭和21年(1946)から24、5年かけて活躍した一群の作家に与えられた名称。反道徳性、反リアリズム、曲折した文体や批評精神などが特徴。

\*<sup>6</sup>坂口安吾…近現代日本文学を代表する小説家の一人。坂口にとって太宰は文学上最大の盟友であったとされる。(1906～1955)

\*<sup>7</sup>M・C マイ・コメジアン…コメディアン、喜劇役者

\*<sup>8</sup>喫茶店…カフェ。客席にホステスを侍らせて洋酒・洋食を供した、今日のキャバレー。

\*<sup>9</sup>鎌倉…神奈川県鎌倉の七里ヶ浜付近。

\*<sup>10</sup>カルモチン…鎮静催眠剤の一つ。ブロムワレリル尿素の商標名。劇薬指定。

\*<sup>11</sup>左翼思想…一般的に社会主義、共産主義、無政府主義など、急進的、革新的傾向な思想。

\*<sup>12</sup>シンパ活動…革命運動などで、党派や組織には加わらず、外部からその運動を感情的、物質的に支持、援助する活動